
文字・ことば・書物

——シュメールにおける「文明の装置」試論——

箕 輪 成 男

1. は じ め に

文字・ことばおよび書物というものは、しばしばそう受けとめられているように、中立的な存在では必ずしもない。その国際的な流れは文化交流という双方向的なものであるよりは、文明の浸透として、一方向的な直流と説明した方が、現実に近いと思われる。そのような視点から見たとき、文字・ことばおよび書物、書籍、出版といった文明のサブシステムが「文明の装置」としてそれぞれの文明においてどのように機能を果たしてきたのかを筆者は明らかにしたいと考えている。本論考はいわばその序章として、人類最古の文明であるシュメール文明について、考察したものである。古代オリエント史の専門家でない筆者にとって原史料を駆使して新たな知見を提示することは不可能である。筆者がここで試みているのは、これまでの史家の研究の成果を「書物の文明史」の立場で再構成し、違った角度から光を当ててみることであり、それ以上のものでないことをお断りしておこう。

現在知る限りで人類最古の文明とされるシュメール文明について、我々が驚くほどリアルに古代の姿を再現し得ているのは、シュメール文明が粘土の文明だったからである。粘土は第一に驚くほどの耐久性をもっている。メソ

ポタミアの乾燥した気候の下では数千年の時間に耐えて、今日我々に古代の遺構を示し、その図書文書室に貯えられた粘土板文書をしばしば完全な姿で、提供してくれているのである。

メソポタミアの遺跡から得られた、そうした粘土板の数は今では50万枚もあるといわれる(書かれたものはその10倍もあったろう)。初期の報告では10万枚とされていたものが急速に数を増やしているのは、発掘に成功する度に、数千から数万枚の粘土板が発見され、情報を拡大してくれるからだ。

第二にシュメールをふくむメソポタミアの遺跡や粘土板が無事今日に伝えられているのは、粘土がどこでも得られる、したがって貴重性の乏しい素材であったためだ¹⁾というのは陳舜臣氏である。もしメソポタミアの古代宮殿や神殿が、大理石や立派な木材で出来ていたら、征服民族はそうした貴重な資材を自分の本国あるいは植民地に、自分たちの神殿や宮殿を建てるために運搬し、再利用をはかっただろうというわけである。たしかに今日小アジアに残るギリシャ・ローマの遺跡は他の土地の神殿・宮殿を壊して運んだ大理石に満ち満ちている。

2. シュメール文明の時代区分

A. J. トインビーは文明の史的過程を発生 (genesis), 生長 (growth), 衰退 (breakdown), 解体 (disintegration) の4段階で捉え、それを彼の比較文明研究の基礎に用いている。

第一の発生についてトインビーは彼の文明として取り上げる21のうち、15は先行文明からの子分れ文明で、6つだけが未開社会から出現した始源的文明であるとする。エジプト、ミノス、シナ、マヤ、アンデスと我々の考察の対象であるシュメール文明がそれである。シュメール文明はなぜ、いかにして出現したのか、そこにおいて文字、ことば、書物がどのような機能を果たしたのか、が我々の考察の対象である。

第二は生長で、発生した文明の萌芽は必ずしもすべてが順調に生育開花するわけではなく、トインビーの言う挑戦に対する応戦を有効に組織しえたもののみが、文明として発展過程をたどることになる。そうした発展過程に文字，ことば，書物がどう関係するのかが我々の問題意識である。

第三の衰退は、文明の発生，生長を主導した少数者の創造的能力の喪失，それに呼応する多数者の模倣の撤回，その結果生じる社会全体の社会的統一の喪失と説明される。諸文明が世界国家による強制的な政治統一に服従するという代価を払って，絶滅か同化かの脅威にさらされながら一時的な猶予をあがなっている状況を意味している。

そして第四の解体は文明の絶滅ないし同化による消失である。²⁾ 第三ないし第四の段階における文字，ことば，書物の文明史的関わりの解明は発生，生長段階におけるそれらの裏返しとしての意味においても重要である。

本稿において筆者はトインビーの枠組に依拠しつつ，シュメール文明の歴史過程を次のように時代区分している。

シュメール文明の時代区分

I. シュメール文明の発生 以前のメソポタミア	B.C. 3200 以前	トインビーのいう挑戦に対する対応の模索。諸部族間の競争・闘争
II. シュメール文明の発生	B.C. 3200～	挑戦に対する有効な応戦の選択。シュメール王国群。シュメール人のシュメール統一
動乱時代 B.C. 2677-2298		
III. シュメール文明の成長	B.C. 2350 ～2150	文明の萌芽の継続的發展，伸長。メソポタミア一円への国際的覇権確立，世界国家出現（シュメール，アッカド），サルゴン王
世界平和 B.C. 2298-1905		
IV. シュメール文明の衰退	B.C. 2150 ～1900	グテア人の侵入。アッカド王国滅亡
V. シュメール文明の解体	B.C. 1894	バビロニア王国出現

このうち本稿で取り上げるのは主として I～III の時期における文字，ことば，

書物の役割である。

なおシュメールの時代区分については論者によって一定せず、定説が確立しているといえない状況にある。数字は大よそのものと考えべきである。

3. シュメール文明の背景

a. 農耕のはじまり——農業革命

ティグリス・ユーフラテスの流域から湾曲して地中海に至る平野は「肥沃な三日月地帯」と呼ばれる。人類最古の文明がメソポタミアに興ったのはこうした形容が示す経済的豊かさを背景にしてである。今日全体として乾燥気候下にあるメソポタミアも、今から5500年前（前3500年頃）にはじまる気候変動以前では豊かな森林地帯もあって、かなり湿潤な土地であったらしい。それが5500～5000年前以後寒冷かつ乾燥した気候にとって代わられたのである。

メソポタミアが豊かな森林を持っていたことは、エジプトに木材を輸出したり、多くの神殿建築に必要な煉瓦の生産のために多量の薪を使ったことから推定できるし、より直接的には環境考古学等の発達によって、たとえば土中花粉の分析という科学的方法で検証されているのである。³⁾

今では乾燥地帯に属するメソポタミアだが、秋・冬の間には若干の降雨もあり山麓地帯や山間の盆地では山からの融雪水があったから、灌漑以前でも小規模の無施肥農業を営むことが可能であった。こうした天水に頼る天水農業では、比較的水が少なくても栽培できる大麦・小麦が中心であった。小規模とは言え、採取・狩猟に頼る生活よりはるかに安定した生活が可能となった。農業革命である。

小麦の単位面積当たりカロリー生産量は米の7分の1と言われるから、メソポタミアの面積当たり人口扶養力は米作地帯に比べればはるかに小さいが、当時の少ない人口は養えたのであったろう。しかし乾燥化が進む一方、次第

に人口が増えてくると、そうした天水農業では間に合わなくなる。そこで、メソポタミアの南部デルタ地帯に灌漑農業がはじまる。エジプトでは年1回秋に起こるナイルの洪水を利用し、溢水をナイル溪谷の平地部分に導くだけだから簡単な灌漑で足りたが、メソポタミアの南部平地部を灌漑するには複雑大規模な工事を必要とした。そうした大工事を統一的に実施するためには、強力な権力が必要であり、そこにシュメールの都市国家と文明の成立する背景があった。⁴⁾ トインビーのことは借りれば、乾燥化という自然の挑戦に対する灌漑農業の開発という応戦によって、シュメール人は最古の文明を形成する基礎を得たのである。

b. 文明の成立——都市革命

自家消費以上に食糧を生産する農耕が進んだ結果、農耕以外の活動に従事する人口が次第に増加し、社会的分業が成立するに至る。農耕に従事しないそうした士工商が集住することによって都市が生まれる。岡田英弘氏によれば、⁵⁾ 中国における国とは城郭に護られた都市のことであり、都市の主要な機能は商業である。農民は市民とは見なされない食糧生産者、供給者、被収奪者としてあるのみである。東アジアの歴史を形成してきた中心的事実は、シルクロードや韓半島、倭国などを結ぶ商業路の消長であると大変明快な断定を行っていて楽しいが、この場合シュメールに誕生した都市も恐らく東アジアの場合と似たものであったろう。

メソポタミアは東方西アジア諸地域と西方地中海沿岸諸地域を結ぶ商業路の交差点であった。しかもメソポタミアは経済的に豊かで恵まれた土地であったから、周辺諸地域から頻繁に部族の移住、侵略が行われ、異文化間の接触・交流が盛んであり、そうした活性の中で、人類最古の文明——都市の文化が生まれたのであった。

前5000年頃メソポタミア北部峡谷における天水農業から南部での灌漑農業への転換を実現したのは、北から南下してメソポタミアに入った非セム系の

シュメール人であった。人類最古の文明の具現者としての栄を担うシュメール人は、やがて灌漑技術が進むにつれ農地を拡大し、その農業生産力を背景に新石器時代末期に散在した部族を抑えて強力な国家を組織したのである。

そうしたシュメールがなぜ人類史上最古の文明となり得たかについて最も説得力のある説明を提供してくれるのは、これもまた陳舜臣氏である。ティグリス・ユーフラテスの沖積平野は農業生産地として最高であったわけではなく、その点ではナイルや黄河の方が上であったかもしれない。にもかかわらずシュメールが最も早く文明を生み出し得たのは、上に述べたとおり、農業生産力に加えてその社会が環境的多様性から刺激を継続して受けたためであり、そして第二にティグリス・ユーフラテスの大灌漑事業を統轄する指導力は、シュメールがもともと強力な統率の下に生活してきた北方の遊牧民であったために生まれ得たものであるというのである。シュメールの人々は大規模灌漑工事を組織し得たのみならず、他部族との戦いにおいても圧倒的な戦力を組織し得た。他の諸部族は組織的な戦闘を知らない烏合の衆であったらしい。⁶⁾

ともあれ、紀元前3200年から紀元前2350年まで続いた初期シュメール王国群は、10ほどの都市国家の集合体として成立し、その最も有力なものがウルクやウルであった。シュメール全体を一国で統合したというよりは、小都市国家群が有力都市の影響下に連立した状態だからシュメール王国「群」とよばれるのである。⁷⁾ こうして生まれたシュメール王国群にはどれほどの人間が生きていたのであろうか。

c. シュメールの人口

国家の豊かさは必ずしも人口に比例しないかもしれない。権力者の収奪部分が大きく、かつそれが非生産的浪費に廻されるとすれば、国家の潜在的経済力が還流して民力を養うことにならず、従って経済発展に比例して人口の増加をもたらさない場合も考えられるからである。しかし、そうした個々の

ケースにおける乖離は別として、大量観察的には一国の経済力は人口に反映すると考えられる。

人間は食べなければ生きられず、一定の人口の存在はその人口を養う食糧生産が備わっていることを示すからである。食べることもできない、あるいは養うこともできない人間がやたらに増えることはありえず、その点マルサスの原理は冷厳に働くからだ。勿論、経済力は食糧以外の衣食住の贅沢品や国家的諸施設の建築等にも廻されるだろう。そうした非食糧的支出の多寡は国家によって勿論異なる。とくに今日のように高度発展した社会と未開発社会の間の格差は大きいが、いま我々の観察しようとしている古代においてはエンゲル係数は例外なく高かったと思われるから、やはり人口は国家の経済力を計る最も重要なバロメーターである。

メソポタミアの最初の文明シュメールの人口は100万人弱であったと言われるが、その信憑性はどうかであろうか。鈴木秀夫氏は世界人口の推計を紹介⁸⁾し、

11000年前 (B.C. 9000)	400万人
7000年前 (B.C. 5000)	500万人
5000年前 (B.C. 3000)	1400万人

としている。B.C. 9000から B.C. 5000まで4000年の間に世界人口は400万から500万へと極めて緩慢な増加を示しているが、B.C. 5000年頃からは農耕地の拡大によって、2000年で3倍弱に増加している。B.C. 3000年の世界人口が1400万人とすれば、シュメールの100万人はありえない数字ではない。

それでは首都ウルクやウルの人口はどれだけであったろうか。シュメールの国家的構成は10ほどの都市が周辺農村地帯を勢力下におく都市国家の集合体で、その最も有力なものウルクやウルの都市人口は数万人であったといわれる。はるか後世のアッシリア、アッシュールバニパル大王の盛時に、首都ニネヴェの人口が12万人であるのに対し、歴史の早い段階で数万人は多すぎるように見えなくもないが、しかしシュメール文明の技術の多様・高度な発

達を考えると、それくらいの人口の集積はあってもおかしくない。むしろ必要であったとも考えられる。一つの傍証として言えることは、人口12万人の都市ニネヴェの面積が7.4平方キロメートルであったのに対し、発掘されたウルクの都市外周は9.5キロメートルもあり、面積では5平方キロメートル以上と推定されることである（人口は伝えられていないがバビロンの都市面積は⁹⁾10平方キロメートルである）。

4. シュメール文明の発生

a. 文明と権力と粘土板

文明を形成するに必要な要素は都市・神殿・文字の3つであるといわれる。筆者の言葉で置き換えるならば経済・政治・行政である。都市とはかなりの規模の人口の集積であり、そうした人口集積が起こるのは商工業その他サービスのためである。農耕のために都市はいらない。文明とはそうした人口集積地：都市（Civitas）に発展する「都市の文化」（Civilization）にほかならないのだ。いいかえると都市とは、何よりも先ず人々の集積を促す経済活動なのである。

第二の要素、神殿は政治の象徴である。経済活動が盛んになり、多くの人々が集まり住むところ放置しておけば必ず秩序が失われ社会は混乱する。そうした人間集団に秩序と調和を与えるためには人々を何らかの形で支配する支配の思想、すなわち政治的イデオロギー、すなわち王権が必要となる。

そうした支配を有効ならしめるためには武力だけでは十分でない。武力を補強し、支配者を武力以上の存在に高めるために王権はしばしば神権と合体し、王は宗教的、あるいは呪術的に超越的存在として立ち現れる。王権と神権が合体しない場合には、王は神官によって聖別される形をとることによってその超越的存在を補強する。さらに王はその権力をいやが上にも偉大強力に見せるために、しばしば神殿、宮殿、陵墓、その他の巨大工事を実行する。

メソポタミアの場合、有名なのはバベルの塔だが、シュメール時代にもそれぞれの都市に神殿・宮殿が設けられている。

文明の構成要件の最後にくるのは文字である。いいかえると経済と政治の円滑な運用を支持する行政の世界である。都市の文化は、その高度に構築された経済機構、政治機構を運営するために、文書による連絡や記録・法の提示を必要とする。すなわち都市国家の管理のためには、いまや官僚制が成立するわけである。また文明という高度に技術的な文化が成立し持続されて行くためには、開発された技術が知識として伝達され、伝承され、継続的に発展を重ねることが必要であり、そうした知識の伝達は口伝えでは無理である。

シュメール文明でそうした伝達のためのメディアとなったのは粘土板に書かれた楔形文字であった。書写の材料がここでは粘土板であったから、それに記録しやすい楔形文字が開発されたのである。

今日、シュメール文明だけでも数万点、メソポタミア文明全期2000年を通じては約50万点もの粘土板が発見され、逐次解読されている。粘土というメソポタミアのどこにでもある材料を筆記材料としたことは人類にとって幸いした。粘土板は乾燥したメソポタミアでは融けて流れることもなく、腐ることもかびが生えることも焼かれてなくなることもなく、数千年の時間に耐えて今日に伝えられ得たのである。

我々が正倉院文書をもつことによって奈良時代の歴史的事実を、むしろ後の時代についてよりもより詳細に知り得ているのと同じく、これら粘土板の解読によって古代メソポタミアの歴史はかなり詳細に探知し得ているようである。ただし粘土板を強調するあまりに、前12世紀以降メソポタミアでは順次他の書写材料、すなわち木、象牙の板、パピルス、皮などがまた用いられたことを忘れてはならない。パピルスは楔形文字でないアラム語を書くためにエジプトからわざわざ輸入されたのである。

b. 楔形文字

人類史上最も早く文字を開発したのがシュメール文明であるといわれる。文明の要件のひとつが文字であるから最も早い文明が最も早く文字を開発したのは当然の帰結であり、最も早く文字を開発できたから、最も早く文明が成立し得たわけでもある。¹⁰⁾だから、シュメール以外に文字の萌芽がなかったわけではない。そうしたいくつもの萌芽の中から経済的、政治的に最も有力なシュメールのことばと文字が国内的、国際的コミュニケーション（交易）の手段として力を得、洗練されるに至ったのである。いいかえると、古代における文字は経済・政治・行政を統合的に支配する権力のための手段であった。そうした文字が都市で生まれたのは古代の権力が都市で生まれ都市国家を形成したからにほかならない。権力行使の実用的な機能を担うために生み出された文字は支配権力の手段として、しばしば彼らに独占された。文字の独占は支配階級にとって、支配のための強力な手段であったからだ。A. K. ボウマンと G. ウォルフは彼らの論文“古代世界における文字と権力”¹¹⁾において文字と権力の関係について考察すべき事柄として、互いに関連し合う二つの問題を示している。すなわち第一は文書への接近やその所有に対する制限、合法的利用への制限、そして文書を読むこと自体への制限といったことをふくむ文字（文書）へのアクセスに対して行使される権力による制限であり、第二は文字（文書）を用いることによって実現される権力の行使、例えば法の布告や経済取引の記録といった二つの側面である。

このような権力による権力のための言語政策は、古代に限ったことでなく現代においても観察される。一見中立的な装いの言語政策のウラには権力の政治的意図がかくされていることが多い。単一言語での生活に馴れた日本人には想像しにくいだが、日本以外の諸国とくに多言語諸国では、言語は常に大きな政治的イシューなのである。

さて都市国家で成立した文字体系は、次にはその都市の対外的影響力の及ぶ限り、周辺都市に拡散して行く。いつの時代でも強力な文明（政治・経済

力)を背負った言語と文字がその文明の影響圏で国際語として機能してきたのである。

最古の楔形文字はシュメール地方の都市国家遺跡ウルク第IV層(前3000年頃)から発見された絵文字(ウルク文字)で、字種数は約1000文字とも2000文字ともいわれる。文字としてはまだ古拙なこの時代では数字と表意文字が並列しており表音化ははじまっていない。この時代は原文字期と呼ばれ、その記録内容は収支計算や貸借・売買など、もっぱら経済活動のための会計簿で、思索の結果や、歴史など高度な文章を書くに至らぬ原初的段階である。

シュメールに人類最初の文字が成立したのは、このようにその活発な経済活動上の必要に応えるためであった。文明成立の最大の要件は都市における大きな経済活動とくに商業、工業の発達であり、それを支える政治・行政的システムであったのだ。やがて前2500年頃からは、上に記したとおりシュメールの他都市でも文字使用がはじまり、字形は絵文字から急速に楔形に変わる。これはやわらかい粘土に石、骨、葦などのペンの角をおしつけて書くのが普及したための合理化、単純化である。ウルク文字の曲線は鉤型または直線に変化し、象形的な原形が失われ、表意文字が加わって文字数は600字ほどに整理される。

上記のとおり、シュメール時代(前3000～前2000年頃)の楔形文字はもっぱら行政や経済活動に伴う記録文書であり、神話、叙事詩讃歌、占い、呪術、文学、辞書などは例外的にしか存在しない。やがてシュメール人が勢力を失い、バビロニア人が支配する古バビロニア時代(前2000～前1500年頃)に入ると、ギルガメシュ叙事詩をはじめとする高度な精神活動を反映した粘土板が突然集中的に現れるようになる。

これは古代メソポタミアにおける一種の共用語であったシュメール語がシュメールの滅亡によってその地位をアッカド語に譲り、死語化するという事態を迎え、それまでシュメール人の間で口誦的に伝えられていた各種の口誦文学を文字化する必要に迫られたためと考えられている。

セム系のアッカド人サルゴン王によって、はじめてメソポタミアの統一国家として形成されたアッカド王国は、言語族としてはセム系でシュメール語とは語系を異にしているが、アッカド語の筆記にシュメール人の楔形文字をとり入れた。このアッカド語はアッカド王朝の滅亡後、南方のバビロニア語、北方のアッシリア語に分れるが、紀元前1世紀ごろまで、メソポタミアの言語として使用され、楔形文字が用いられたのである。

シュメール語楔形文字は、表意文字、音節文字と決定詞から成り、次第に整理・簡略化されても600字から1000字もあったから、その習得は決して容易ではなく、支配階級子弟のための書記養成学校で系統的に教育が行われた。書記学校は授業料で維持され、政治・経済に対して影響を与えた宗教も、ここではむしろ制約とはなっておらず、かなり自由であったことが、粘土板の記録からわかっている。

書記は税や国家資材の管理、労働者への支払い、貿易などの主要な都市機能でテクノクラートとして重要な役割を果たしたから、次第に権力を集めるに至った。そうした書記のほかに、楔形文字のヨミカキ能力をもっていたのは、神官、商人などで、古代においてヨミカキ能力が最も広く、深く普及したのはメソポタミアにおいてであった。一方シュメールをはじめメソポタミアで楔形文字、エジプトで象形文字が2000～3000年も続けて用いられ表音文字によるアルファベット化への進化がなかったのは、そうした文字の簡略化が彼等書記の権力を奪うことになるから、書記自身が文字の簡略化を意図的に妨げたのだという。すでに述べた支配階級による文字の独占の一面である。¹²⁾

c. 書物の誕生——法典編纂

前3000年頃に開発されたシュメール文字が、何よりも権力による権力のための手段であったとするならば、それ以後前2000年頃に至る、約1000年の間に作られた初源的な“本”もまた権力のための手段であった。粘土板文書の体系的集積としてのそうした“本”の例としては何よりも先ず法令：布告集

がある。

林深山氏の説くところによると、メソポタミアの法律の特色は、

1. 平安と秩序の重視（安定性の追求）
2. 実定法の発展
3. 神と結びついた正義の観念

の3つであるという。¹³⁾

ここで1の秩序の重視とか3の正義の観念とかは、メソポタミアの置かれた厳しい風土と政治的環境から来たものである。メソポタミアの気候はエジプトに比べればはるかに厳しく、ティグリス・ユーフラテスの流域、とくに南部では土地が平坦なため洪水が起こると制御しにくく、灌漑もまたむずかしかった。したがって彼らの農業は、年3毛作（実際は2.5毛作）までも可能な年がある一方、収穫ゼロの年が頻繁にあるなど安定性を欠いていた。

他方政治的には、両側を砂漠で守られたナイル溪谷とちがひ、北方の山岳部族や西方・南方の遊牧民の襲撃にいつもさらされた無防備、開放型の土地柄であったため、始終不安、敵意、不信にさらされ、精神的にはエジプトの楽観主義に比較して、悲観主義的であり、従って平和・秩序・正義への願いが法の上に強く示されたのである。

しかし我々のように書物の歴史を考える者にとって、より重要なのは2番目の実定法の発展であろう。王の個人的判断に依存して法律の裁断が行われるのではなく、文字に書かれ実定された法によって裁いたというのは、古代にあって驚くべき先進性であるが、しかもその条文が数百カ条にもわたって編纂されているとは驚くべきである。

同時に神であり王であるファラオを戴くエジプトでは王の権力は絶対であり、王権を制限し補足するために人々の間のルールを確立する目的の法律は存在しなかったと思われる。これに対してメソポタミアの場合、都市の首長も都市連合としての国の王たちも、みな人間であり、神の執事に過ぎない。メソポタミアの人々が至高の存在としての神の真意を宗教的に探りつつも、

それを実現する手段として現実的な考慮の下に実定法を設けたのはメソポタミアのおかれた自然的、政治的環境が上に記したように厳しかったからであろう。

実定法の集大成として有名なハンムラビ法典(282条)が編纂され、石柱に彫って施行されたのは前1700年頃のバビロニア時代であるが、ハンムラビ法典は先行する諸法典(ウル・ナンム法典等)を抜粋編成して作られたもので、シュメール法とアッカド法の両法系が折衷されているといわれる。シュメール時代にもすでに実定法が存在したのである。¹⁴⁾

d. ギルガメシュ叙事詩

初源的な本の第二の例はギルガメシュ叙事詩に見るような神話的な作品の体系化である。叙事詩は詩の最も古い形で民族を代表する英雄の行為を記したものとされるが、そのような“作品”は本来王権の正統化、神聖化による補強を目的として生みだされたものであり、それが後世次第に洗練されて文学性を高めて行ったのである。シュメール時代の神話的作品として前2000年以前の古いシュメール語で書かれたギルガメシュ叙事詩はその後バビロニア語、アッシリア語、ヒッタイト語などに翻訳され、断片的な形ではあるが遺されている。19世紀半ば頃、アッシュールバニパル王(前7世紀)の王室図書館遺跡から発見されたアッシリア語12枚の粘土板が、ギルガメシュ叙事詩の姿をよく示している。

ギルガメシュとホメロスのイリアスおよびオデュッセイア、ローマのアエネーイスの4編が古代叙事詩の傑作とされ、世界的に文学の源泉と見なされている。ギルガメシュが2000年以上埋れたままであったため、かつてはギリシャのホメロスの2作品が叙事詩の開祖と考えられていたが、ホメロスの作品や聖書までがギリガメシュ叙事詩の影響を受けているといわれるように、このシュメール文学が現在知る限りで最古の叙事詩であり、シュメール文明の広域的浸透力の強さが示されている。しかし、アッシュールバニパル図書

館の粘土板は前7世紀のものであり、シュメールの時代にどのような形で流布していたかは必ずしも明らかではない。

e. 継承と伝播

すでに記したとおり、それまでシュメール語でシュメール地方の人々に口誦的に伝えられてきた文学、歴史、宗教等の作品がシュメールの滅亡、古バビロニア（前2000～前1500年頃）の台頭の時代にその滅失を恐れて集中的に文字化されたという歴史的事実には、文明の装置としての書物の誕生・継承・伝播を明らかにしようとする我々にとって貴重な示唆がふくまれている。

第一にそれまで連綿と口誦で伝えられてきた作品が、言語の置換という伝承の断絶の危機に、その時間的制約を超克するための手段としてはじめて文字化され「書かれた作品」：書物とされたのであり、第二にアッカド王によるメソポタミア全域支配の統一国家成立がもたらした地域的拡大に対処する空間的制約の超克がまた文字化、書物化の背景のひとつとなったのである。すでに見たように文字による情報伝達の時間的空間的制約の超克が、単に中立的に起こったのではなく、権力の行使を有効ならしめるための手段であったように、体系化された作品としての書物の作製・保存・伝播もまた権力によって、体制を維持するための不可欠の手段「文明の装置」にほかならなかったのだ。知的情報の生産と管理を牛耳る者が文明の代表者となることは、古代においても現代においても変わるところはないのである。

というわけで、メソポタミアにおける文字の誕生が、前3000年頃であるのに対し、書物の誕生はかなりおくれて、前2000年頃と考えられている。勿論萌芽的書物は散発的に早い段階で作られたであろうが、それが社会的なサブシステムとして普及するようになったのは、アッカド時代前2000年頃以後と考えてよさそうである。いいかえれば、前3000年頃から前2000年頃に至るシュメール語時代には楔形文字はもっぱら経済・行政のための記録文書の作製に用いられたのであり、前2000年のアッカド時代以後法典や神話、叙事詩の

ほか、宗教、占い、文学から辞書に至るまで多様な“書物”が作られたのであった。

f. 図 書 館

シュメールで、行政・経済の記録文書やより作品的な文学や法典が粘土板によって作製されるようになると、次いでその保存、利用が必要となる。もともと権力行使の補助手段として時間と空間の制約を超えて情報伝達をはかるための文書・作品だから当然のことである。

こうして粘土板による情報の蓄積は経済・行政上の必要による文書館と作品保存のための図書館の二つの性格をもっている。往々にして両機能は合体し、権力中枢にサービスするためのひとつの情報集積所を成していただろう。そうしたゆるやかな意味での図書館をその集積者によって3種類に分けることができる。神殿図書館、王室図書館、個人（貴族）図書館である。

メソポタミアの図書館が早くから成立したのは、これもまたその活発な経済活動：商業・貿易のためである。経済取引・販売管理、国家財政、法的管理等の記録が権力による行政の複雑化、官僚化とともに、先ず保存される必要が生じたのだが、そうした保存を可能にしたのは、言うまでもなく、粘土板の耐火、耐久性である。古代オリエントの文字資料全体の中で量的には、シュメール、アッカド語のテキストを100とすれば、エジプト語は20、ヒッタイト語は1であると矢島文夫氏が計算しているが、作製された文書の多寡と共に、粘土板がパピルスより圧倒的に良い耐久性をもっていたことを示すだろう。

エジプトの図書館の収集物が公文書中心であったのに対して、アッシリアの図書館はその他の書物的作品を多く所蔵したから、世界最初の本格的図書館はアッシリア人が創始したと言われる。アッシリア人とそれに先行するシュメール人たちは組織的に粘土板を収集し、配列し、あらゆる文献をふくむ大規模な蔵書を作り上げていたのである。

シュメール地方のウルやニップールその他諸都市の遺跡から、すぐれた粘土板の収集が発掘されており、前2000年以前にシュメールに公共図書館や個人図書館が沢山あったことを示している。メソポタミアの西、ヒッタイトからも楔形文字の粘土板が多数発掘され、その中には収集図書目録までもがふくまれていた。

アッシリアの有名な図書館はアッシュールバニパル国王の作った前7世紀のニネヴェの図書館である。数千枚の粘土板を収蔵し、王宮司書のもとに20人以上もの書記が粘土板の作製と保管に任じていたという。所蔵文献は歴史年表、政府の記録・通信・書翰などのほか、文法、詩、歴史、科学、神話、宗教などあらゆる種類のものが揃えられていた。数百年以前の古い粘土板を現代アッシリア語に翻訳するための辞書も備えられていた。ニネヴェ図書館の粘土板は主題によって配列され、部屋ごとに主題のちがう本が管理され、本の内容目録が、扉や壁に書かれてあり、本の題名か本文の一行目、行数、枚数まで示されているという念の入れようで、現代の図書館以上とも言えそうな親切さである。

g. 粘土板への「印刷」と「出版」

人間の考えはどこも同じで、粘土板文書の作製が度重なると、毎回署名する煩わしさを避けるため、円筒状の印判を用意し、毎回それを押捺して署名に代えることをはじめる。印刷行為の原形といえる。さらにこうした手法を拡大し、シャルマネザー三世（前9世紀）は戦勝ニュースの粘土板（瓦版）を多数複製して人々の間に配った。

前6世紀のカルデア国（後期バビロニア）では、学問・技芸が大変発達し、国民の多くは文学を理解し、好んで読書をする風習がひろまった。国民の読書意欲に応えるため到るところで粘土板の書物の出版が流行した。版材としての粘土をねる者、文書を作るもの、写字生、粘土板干し固め係、焼き固め係、販売担当者等各種専門に分かれ、盛んに書籍の印刷と出版が行われたわ

けである。印刷・出版された粘土板書物の内容は、小説、歴史、地理、天文、算数、商業で、とくに宗教書が多かった。そうした粘土板書物の判型は、今日A5判、A6判、B5判、B6判、菊判等種々の判型が使われるように、長方形、円形、楕円形、角縁丸形など一定せず、前6世紀には樽形が流行した。¹⁵⁾

このように前6世紀すなわち2500年以上も昔の後期バビロニア時代に、一種の出版機能が存在していたことは驚くべきであるが、我々の考察の対象である前2000年頃までのシュメールでは、まだ出版以前の初源的な形での本作りが行われていたにすぎない。ここで次の疑問はたとえ初源的な形であれそうした「文明の装置」としての本作りが、すぐれて内発的に発生したといわれるシュメール文明においてどのような過程を経て創始されたのかという問題である。今後発掘粘土板の解読が進むにつれて、この辺の事情が解明されることを期待したい。

5. シュメール文明の成長と浸透

以上文明という名の権力構造において、文字、ことば、書物が文明の装置として、シュメールにおいてどのような機能を果たしてきたかを概観した。次の問題は文明という権力構造がその周辺地域に浸透し、世界国家を形成するに当たって、文字、ことば、書物がどのように機能したかをシュメールの場合について明らかにすることである。

かねて筆者は翻訳という国際コミュニケーション活動の発生に関連して、諸国家・地域のモデル化を試み、(1)孤立的国家群、(2)国際化社会形成国家群、(3)文化的従属国家群に3分した。¹⁶⁾このような視点から見た時、メソポタミア、エジプト、パレスチナ、アナトリア、イランをふくむ古代のオリエント地方は、正しくひとつの国際化社会を形成していたのであり地域内諸国の活発な(平和的・暴力的)交流を通じて互いに強い刺激を受け、進んだ文明を生み出したのである。シュメールは決して孤立的に突出していたわけではなく、国

際化社会の中で最も早い時期に比較的に周辺諸国より有力となり、中心国のひとつとなったものである。国際化社会における文明の生成過程の例として、極めて興味深いものがある。

前3000年代のシュメールは10ほどの都市国家の集合体で、初期シュメール王国群と呼ばれ、前2370年頃最も強力となったウンマの王ルーガルザゲシが周辺諸都市国家を征服してシュメール最初の統一国家を形成するが、間もなく前2350年頃サルゴンが反乱を起こし、アッカド王朝をひらいた。アッカドはシュメールだけでなく、全メソポタミアを統一し、メソポタミア最初の王朝となった。1000年近く続いた最初期のシュメール王国群時代は、統一王朝を欠く群雄割拠の時代であったが、そうした緊張状態の継続の中でこそ、シュメール人は彼らの文明を維持し発展できたのであった。

そうしたシュメール文明の周辺への浸透の史実を我々の研究対象である、①楔形文字、②シュメール語、③シュメール作品について国際コミュニケーション的視点から整理確認してみよう。

すでに記したとおり筆者は、国際コミュニケーションの視点から翻訳書出版の歴史を概観した。そこでは翻訳書出版について、有力な文明という高圧地域の生んだ作品がより低圧の諸国、諸地域へ浸透する姿を分析したのであったが、同様の関係は国際コミュニケーションのより基本的手段である文字とことばと作品（原典）そのものについてもいえるだろう。シュメール文明の例でいえば、第一にシュメール文明の開発した楔形文字はメソポタミア全域をはじめその周辺諸国、諸地域によって利用された。その地域的拡大の歴史的継起は、シュメールに続いて前3000年紀にシリアのマリ王国やエブラ王国に伝播し、前2000年頃に小アジアへ、前1800年頃にはイランへと時間差を置いて伝播している。

日本語が中国の漢字を用い、それに音よみだけでなく、訓よみを与えることによって、中国語と全く異なるよみの日本語を表現しているように、シュメールの楔形文字もまた、周辺諸国・地域においてそれらのことばを表記す

るために用いられ、その際シュメール語の文字にしばしば全く異なるよみが与えられていたことがわかっている。すでに見てきたように、楔形文字の使用がシュメール一国からメソポタミア全域にひろがり、さらに周辺地帯の諸文明、諸文化によって3000年にわたって利用されたことは、シュメールの文明の影響力、浸透力の強さを示すものにほかならない。

アンリー＝ジャン・マルタンはその著“文字の歴史と権力”¹⁷⁾において「永い時間の経過の中で民族としてのシュメール人はアッカド人の中に融合されてしまうけれど、彼らのことばシュメール語はヨーロッパにおけるラテン語と同様、宗教と文学の用語としてメソポタミア文明の終焉まで使われ続けた。アッカド語が中東全域で理解されたのは、楔形文字のおかげであり、楔形文字はシュメール語とアッカド語のほか、エブライト語（シリア、前3000年紀）、エラム語（イラン、前2000年紀から前1000年紀）、フリル語（北メソポタミア、前2000年紀）、ウラルトゥ語（アルメニア、前1000年紀）、パライ語（トルコ、前1000年紀）、ヒッタイト語（アナトリア前2000年紀中頃）、その他多くの言葉を表記するのに用いられた。楔形文字がそのようにメソポタミア全域で用いられたのは、メソポタミア商人たちの活発な貿易のためであると共に、その背後にある多くの古代的帝国主義の権力行使のおかげであった」と書いている。このようにシュメールで開発された楔形文字は、メソポタミア全域とその周辺地域で用いられ、時間的には前3200年頃から、ペルシャによるバビロニアの攻略（前330年）まで3000年近い生命を保った。

第二に文字だけでなくシュメール語ということば自体が、古代オリエントのかなり広い地域で外交用語・商業用語として用いられたという事実がある。後にギリシャ語やアラビア語が環地中海諸国での国際語として外交や商業に用いられたのと全く同じで、古代オリエントの国際語として機能したものであり、シュメール自体が滅亡した後にも2000年の永きにわたって、死語となったシュメール語がとくに教育・行政・学問・社会的権威のために利用されたことは中世ヨーロッパにおけるラテン語の果たした役割と全く同じであった。

第三に作品のレベルでいうならばシュメールにおいてシュメール語で書かれた作品は翻訳されることなくそのままコピーされ、周辺諸国に流通したし、重要な作品の場合にはそれぞれの国のことばに翻訳もされた。翻訳は古典シュメール作品を現代語（アッシリアやバビロニアの）に翻訳するためにも作られた。

以上古代オリエント世界とくにメソポタミアおよびその周辺地域で国際コミュニケーションの手段としてシュメールの文字、ことば、作品（書物）が高度に利用されていたことがわかる。そしてそれらのメディアの流れは常にシュメールからその周辺へという方向において起こったのであった。

最後にシュメール文明が周辺地帯に強力な発信をなし得たことと粘土板との関係を考えてみたい。

第一に粘土はメソポタミアではどこにでもあるほとんどコストのかからない書写材料であった。また粘土の可塑性を利用すれば、コピーを作ることも簡単であった。だから複製された粘土板ニュース（瓦版）を配布したり、作品の複製を提供することは、もし権力がその公開を禁止しない限り、比較的容易であった。それに対してエジプトのばあいは事情が全く異なっている。パピルス紙はナイルに生える水草パピルスの髄に加工して紙状にしたものであり、加工にはかなりの手間すなわちコストがかかる上、ひとたびパピルスに病気が広がると、その供給が途絶えることになる。またアナトリアのギリシャ植民市ペルガモの図書館が、図書的一大蒐集に成功し、アレキサンドリアの図書館の勢威をしのぐ勢いになると、エジプトの政治権力はペルガモへのパピルスの輸出を禁止したため、ペルガモ側はパピルスに代わる書写材料として羊皮紙（パーチメント）を開発したといわれるように、パピルスの生産には地域的独占があった。このようないくつかの条件があった上、パピルス紙の耐久性は低く、かつ巻軸仕立のパピルス書物は所蔵と利用に便利とはいえず、さらに重要なことは粘土板におけるような押捺という簡便な方式による複製が全く不可能であったことなど、粘土板に比べて相対的に不利な書

写材料であったといえよう。そうした書写材料上の制約がエジプトにおけるファラオの権力を維持し、メソポタミアに比べてはるかに専制的、非民主的政治形態を継続させたひとつの背景であったといえそう。粘土板とパピルス、楔形文字とエジプト象形文字の対比が、シュメール（メソポタミア）とエジプトの比較文明史上重要な一テーマであることは否定できない。書写材料として粘土とパピルスを用いるそれぞれの場合について、コスト等の定量的なデータを入手できれば、より説得力のある分析が可能だが、今のところ筆者はそうしたデータを入手していない。

結 論

以上不十分ながら観察してきたシュメール文明の歴史に照し、我々は文明の発生と浸透のメカニズムとそこにおけるシンボルサブシステムとしての文字、ことば、書物の役割について、経験的な知識として次のような仮説を樹てることが可能かもしれない。

- (1) 文明は一定の安定した生活様式の持続的進行の中にある平安から生まれるのではなく、生活様式の変革を迫られる危機的状況がひき起こす国際的な緊張と混乱の中から生まれる。
- (2) 文明は部族が孤立して生きる孤立国家地帯においてよりも、部族間の国際コミュニケーションが日常的に起こる国際化社会形成地域において生まれる。
- (3) あまりに強力な巨大権力が独歩的に存在する場合よりも、より拮抗する諸勢力の競争的対立地帯の方が、文明の浸透が早く深く行われ、より普遍的な文明を生み出す。
- (4) 部族の秘儀の手順を記憶したり、占いの目的で開発された文字は、交易など国際的経済活動の目的で開発された文字ほどには文明の成立に貢献しない。¹⁸⁾

- (5) より普遍的な構造をもつ文字の方が、そうでない文字よりも文明の浸透を促進する。したがって文明はより合理的な文字システムの開発を指向する。
- (6) 文字・文書（書物）の利用に対する権力による制限の少ない場合の方が多い場合より文明の発生を促進する。
- (7) 権力はシンボルサブシステムを独占することによって、また独占が破られた後にはその操作によって権力としての文明の維持・強化をはかる。
- (8) 書写材料の性質，入手と複製の容易さ，コスト等が文明の性格に大きな影響を与える。
- (9) 文明的主導国のことばと文字と作品（書物）は国際的通用力をもち，影響下にある諸地域に浸透する。すなわち文明国のことばはリング・フランカとして影響下諸国・諸地域の経済・外交・宗教・哲学・文学の用語となり，文明国の書物は聖典，法典，哲学・文学の古典として流通する。そうした普遍的メディアをもたない文化は強力な文明となり得ない。
- (10) 国際化社会形成地域における強力な覇権国の文字，ことば，書物（作品）は当該国が覇権を失った後も長く生き残ることがある。

注

1) 陳 舜臣「古代オリエント」『ビジュアル版 世界の歴史』2巻 月報 講談社 1984

2) A. J. トインビー「歴史の研究」『世界の名著61』 中央公論社 1983

トインビーは文明の発生を説明するために挑戦と応戦という概念を用いる。シュメールの場合，挑戦は前5000年頃にはじまる気候の乾燥化であった。この乾燥化に対する対応の方法は三つあった。生活様式を変えずに住みうる土地に移動するか，故国に止まって乾燥に堪える鳥獣をとってみじめに暮すか，居住場所と生活様式を変えて牧畜・農耕に従事するかである。はじめの二つは停滞・衰退への途であり，居住地と生活様式を果敢に変えた第三の場合のみが挑戦に対する応戦であり，そうした応戦の結果発生したのがシュメール文明であると

いうのである。

本稿ですでに観察してきた諸事実：シュメール人が北方からの移動によってティグリス・ユーフラテス下流地帯に住むに至ったこと、狩猟・採集経済から牧畜・農耕経済への転換という応戦を部族の統合によって他に先んじて組織し得た政治力等は、トインビー説に符合するものといえよう。

- 3) 安田喜憲『気候が文明を変える』 岩波書店 1993

安田喜憲「5000年前の気候変動と都市文明の誕生」金関恕・川西宏幸編『都市と文明』〈講座文明と環境4〉朝倉書店 1996 所収 10頁～29頁

- 4) 織田武雄「ナイル河とチグリス・ユーフラテス河」前嶋信次他編『オリエン
ト世界の誕生』〈オリエン特史講座1〉 学生社 1984 所収

- 5) 岡田英弘『日本史の誕生』 弓立社 1995

- 6) 陳 舜臣, 前掲論文

- 7) 佐藤 進「メソポタミアの政治体制」前嶋信次他編『古代文明の発展』〈オリ
エン特史講座2〉 学生社 1985 所収

佐藤進氏は上記論文においてメソポタミア最初期の国家形態に関する諸説を紹介している。先ずファルケンシュタインの「神殿都市論」によれば初期王朝時代のシュメール都市は「神殿都市」の性格をもっており、都市国家の全国土と住民は都市主神の所有であり、神の代理者としての神官エンが神殿に住んで都市の行政をつかさどった。やがて神官の宗教的機能と世俗的機能が分化し、宮殿をもつ王が誕生し次第に権力を拡大する。都市国家には自由市民の集会が存在したが、その意義は過大に評価すべきでないとしている。これに対してジェイコブセンは市民の全体集会を重視する「原始民主政」論を提唱している。全体集会は必要に応じて招集され、行政的案件には「エン」を外来的脅威には「王」を選んだが、これらは危機の期間にのみ置かれ、平和時には原始民主制的組織に戻るというものである。このような形態は個々の都市国家のみでなく、都市国家の連帯（同盟）としてのシュメール地域全体に対しても適用されたとし、初期王朝時代第Ⅰ期がその存在時期であり、第Ⅱ期から第Ⅲ期初に原始王政へ移行し、アッカドの「原始帝国」をへて、ウル第三王朝に至って、はじめてメソポタミア全域を支配する中央集権的国家が成立したとしているのである。ジェイコブセンの議論は人類最古の文明シュメールの成立を考える上で示唆に富んでいる。王権の専制的支配下にあったエジプトと、より民主的、競争的であったシュメールの社会体制の差が文明成立にどのような差異を与

えたかという点についてである。

- 8) 鈴木秀夫『気候の変化が言語をかえた』NHK出版 1990
- 9) 出典：(1) Felix Reichmann, *The Sources of Western Literacy*, Greenwood Press, 1980, p. 46
(2) 板倉勝正「シュメール都市」前掲『古代文明の発展』〈オリエント史講座2〉所収 162頁
- 10) 北川敏男氏は古代文明出現のメカニズムについて情報文明論の視点からイギリスの考古学者ランフリーの説を紹介している。すなわち文明はシステム論的に見て、五つのサブシステムをもつトータルシステムとして把握することができる。生活、技術、社会、シンボルおよび交易・通信の五つのサブシステムである。これら五つのサブシステムは相互に影響を与え合い乗法効果を発揮するが、この中のシンボル・サブシステムがとくに重要であり、文明とは物質的価値がシンボリック競争のための場となり、物質的価値と社会的価値とがシンボルとして等価になるような仕組みであるというものである。ここでランフリーのいうシンボル・サブシステムには宗教、芸術、言語、科学がふくまれる。本稿の扱う文字、ことば、書物がこれらシンボル・サブシステムの最も重要な部分として他のシンボルやサブシステムと深くかかわっていることはいうまでもない。

北川敏男「文明の歴史像——情報史観へのフロレゴメナ——」北川敏男編『情報文明の展望Ⅰ』〈講座情報社会科学17〉学研 1974 所収 121～122頁
- 11) Alan K. Bowman et al. eds., *Literacy & Power in the Ancient World*, Cambridge Univ. Press, 1994
- 12) 書記能力を独占した神官、行政官僚、および商人が社会の支配階層として立ち現れるあり方が、メソポタミア、エジプトおよび中国においていかに類似していたかを Jack Goody と Ian Watt が指摘している。

Jack Goody ed., *Literacy in Traditional Societies*, Cambridge Univ. Press, 1975, pp. 36-37
- 13) 林 深山「契約思想と法律体系の整備」前掲『古代文明の発展』〈オリエント史講座2〉所収 75頁
- 14) 江上波夫監修 増田精一編『メソポタミアとペルシア』〈世界の大遺跡4〉講談社 1989 63頁
- 15) 島屋政一『印刷文明史』（第1巻）五月書房 1980

- 16) 箕輪成男『国際コミュニケーションとしての出版』 日本エディタースクール出版部 1993 106～110頁
- 17) Henri-Jean Martin, *The History and Power of Writing*, Univ. of Chicago Press, 1994
- 18) Jack Goody, *The Interface Between the Written and the Oral*, Cambridge Univ. Press, 1987, p. 30

参考文献

- ①伊東俊太郎『比較文明』 東京大学出版会 1987
- ②梅原 猛他編
『農耕と文明』〈講座文明と環境 3〉 朝倉書店 1995
『都市と文明』〈講座文明と環境 4〉 朝倉書店 1996
- ③岡田英弘『日本史の誕生』 弓立社 1995
- ④小川英雄『古代のオリエン』〈世界の歴史 2〉 講談社 1995
- ⑤小川英雄他『世界の歴史 4 ——オリエン世界の発展——』 中央公論社 1997
- ⑥ルイ＝ジャン・カルヴェ『文字の世界史』 河出書房新社 1998
- ⑦エリク・ド・グロリエ (大塚幸男訳)『書物の歴史』 白水社 1992
- ⑧島屋政一『印刷文明史』(第1巻) 五月書房 1980
- ⑨ジョルジュ・ジャン『文字の歴史』 創元社 1990
- ⑩ジャン・ボッテロ他『メソポタミア文明』 創元社 1998
- ⑪前嶋信次他編
『オリエン世界の誕生』〈オリエン史講座 1〉 学生社 1984
『古代文明の発展』〈オリエン史講座 2〉 学生社 1985
- ⑫増田精一編『メソポタミアとペルシア』〈世界の大遺跡 4〉 講談社 1989
- ⑬トム・マッカーサー (光延明洋訳)『辞書の世界史』 三省堂 1991
- ⑭松村武雄編『バビロニア・アッシリア・パレスチナの神話伝説』 名著普及会 1979
- ⑮武藤光朗他『情報文明の歴史的展望』〈講座情報社会科学17〉 学研 1974
- ⑯安田喜憲『気候が文明を変える』 岩波書店 1993
- ⑰Alan K. Bowman et al. eds., *Literacy & Power in the Ancient World*, Cambridge Univ. Press, 1994

- ②David Crowley et al., *Communication in History : Technology, Culture, Society*, Longman, 1995
- ③Jack Goody ed., *Literacy in Traditional Societies*, Cambridge Univ. Press, 1975
- ④Jack Goody, *The Interface Between the Written and the Oral*, Cambridge Univ. Press, 1987
- ⑤Henri-Jean Martin, *The History and Power of Writing*, Univ. of Chicago Press, 1994
- ⑥Felix Reichmann, *The Sources of Western Literacy*, Greenwood Press, 1980
- ⑦Karl Schottenloher, *Books and the Western World : A Cultural History*, McFarland & Co., 1989